

ニカメイガ情報第1号（水稻）

令和7年7月2日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病虫害防除室

**第一世代幼虫による心枯れ被害が目立つほ場があります。
第二世代幼虫による被害に注意しましょう。**

1 発生状況

6月下旬の巡回調査（県内126ほ場調査）において、ニカメイガによる被害株率は0.53%（平年0.18%、前年0.11%）で、過去10年間で2番目に高い状況でした。

また、県内各地に設置した予察灯では、5月から6月にかけて越冬世代成虫が各地で誘殺されており、誘殺数もやや多い状況です。

このため、第一世代成虫の発生が多くなる可能性がありますので、特に近年被害の多い地域では、第二世代幼虫による被害に注意しましょう。

2 ニカメイガについて

越冬世代成虫は田植え後のイネに産卵し、ふ化した第一世代幼虫がイネの茎内に侵入し食害します。被害にあった茎は葉鞘褐変を起こし、食害量が多い場合は枯死し、心枯れを生じさせます（図1）。

次の第一世代成虫もイネに産卵し、ふ化した第二世代幼虫がイネを食害します。出穂期以降の被害では、白穂を発生させ収量に影響します。

3 防除対策

ニカメイガは発蛾最盛期（成虫発生ピーク）の数日後～7日後の薬剤散布（粒剤は発蛾最盛期）が効果的ですが、ニカメイガは断続的に発生が続く傾向があるため、成虫発生のピークを捉えることが難しいです。

このため、予察灯の誘殺数データ（あいち病虫害情報 調査データ）や、過去の発生消長（図2）、ほ場での発生状況（成虫の発生が目立つ頃）などを参考に、成虫の発生が増えてきた時期にパダンS G水溶剤（収穫21日前まで）などで防除しましょう。



図1 幼虫の食害による茎の心枯れ
（一部の茎が枯れて変色）

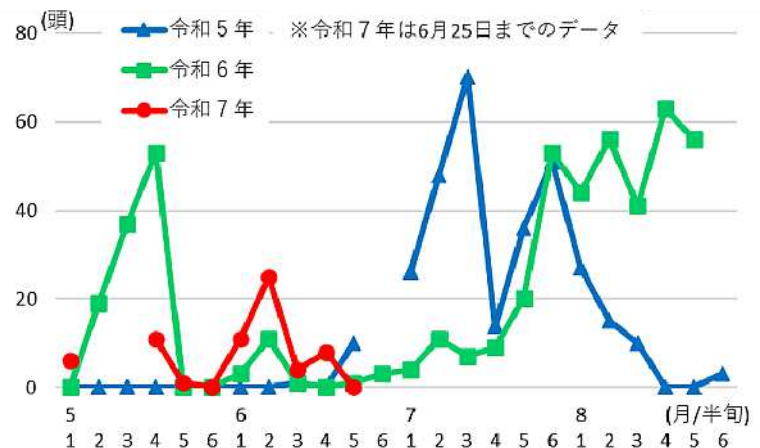


図2 弥富市予察灯の成虫誘殺状況（令和5～7年）
令和5年は7月上中旬頃から、
令和6年は7月下旬頃から発生が増加